



Republic of Uzbekistan

EARTH GALLERY Vol.145 [ウズベキスタン共和国]

地球ギャラリー
写真文・鈴木革(写真家)

多くの歴史的建造物を擁する、世界遺産に指定された都市サマルカンド。
美しい彩色タイルの霊廟が並ぶシャーヒ・ズインダ廟群は人気の観光地で、11世紀から造られた20以上の建物が並ぶ。

歴史ある“若者の国”



郊外ではヒツジやヤギを追う大陸的な遊牧風景に出会う。スルハンダリヤ州の山岳地帯。



遠方にアフガニスタン国境のムタリヤ川が見えている。豊かな穀倉地帯だが厳しい監視下に置かれている。テルメズ近郊にて。



街道沿いの地元運転手らが立ち寄るローカルレストラン。少しいかつい感じだが、皆穏やかな人々だった。カシュカダリア州の山間部にて。



上写真と同じく国境の遺跡カンブルテバ。アレクサンドロス大王の渡河地点とされ、遺跡修復の日干レンガを作っていた。



サマルカンドの中心、レギスタン広場のウルグベク・マドラサ(イスラム教の学院)。新婚の妻たち専用という美しい衣装が映える。



夏は結婚シーズン。世界遺産を背景に、大事な記念写真を撮るカップルがあちこちで目につく。プハラのタキ・サラフォンにて。



人々はパーティが大好きで、高級レストランではよくパーティを見かける。爆音、ダンス、カラフルな照明、すべてに圧倒される。サマルカンドにて。



サマルカンドの台所、ショブバザール。あらゆるものが屋内、屋外に山積みになっていて、目にも鮮やか。



ウズベキスタンではバザールのことをタキといい、直射日光を避けるために天井を覆った美しい商店街がある。世界遺産の都市プハラのタキ・サルガロン。

中央アジアという地域の歴史はたいへん古く、紀元前にさかのぼる。ウズベキスタンに加えてカザフスタン、トルクメニスタン、キルギス、タジキスタンをまとめて西トルキスタンと呼び、隣接する中国側の東トルキスタンと区別している。トルキスタンとは「トルコ人の住地」という意味で、西トルキスタンでは紀元前から活躍したイラン系のソグド人の地^{*}に6世紀ごろテュルク系遊牧民の突厥^{*}が侵入してテュルク化が始まった。8世紀にはアラブ勢力の侵入によってイスラム教化され、10世紀のイスラム王朝下で文芸や学問が発達して中央アジア文明の下地ができた。さらに13世紀にモンゴルの支配を受け、14世紀にはその末裔といわれるティムールが登場し、古都サマルカンドを中心に世界帝国を築き上げた。

地勢的に西トルキスタンは北部の草原地帯と、東のパミール高原から西流する大河がつくる南部のオアシス地帯に分けられる。北部草原では騎馬遊牧民が勇猛に疾走して、南部オアシスでは華麗な都市文明が発展した。ウズベキスタンはこの古代オアシス都市国家の中心地であり、サマルカンドやブカラ、ヒヴァ、コーカンドなど「シルクロードの華」ともいえる歴史的な町を擁している。

一方で、ウズベキスタンという国はきわめて「新しい国」でもある。西トルキスタンの5か国はソビエト連邦が自治区

分として画定した境界がもとになり、1991年のソ連邦解体によってそれぞれ独立して新しい国家になったのである。ロシア支配より以前は都市国家が群雄割拠して、ときに争いながらも、近似する言語や文化を共有する一塊の文明圏であった。

あらためて地図を俯瞰すると、内陸国に囲まれたウズベキスタンは二重内陸国と呼ばれている。つまり外洋と2カ国以上を隔てた国のことで、それは世界に2カ国しか存在しない。ちなみにもう1カ国はヨーロッパの小さな公国リヒテンシュタインだが、ウズベキスタンは外洋までのルートがいずれも数千キロメートル以上の距離があり、世界で最も海から遠い国といえる。むろん空路は世界各地と結ばれているが、それは人間や軽量物資の輸送に限られ、重量物はやはり陸海運に頼ることになる。世界の重量基準での物資輸送は97パーセントが海運といわれるが、おのずとウズベキスタンの貿易相手国は隣国をはじめロシアや中国、トルコなど地続きの国が大きな割合を占める。だが陸運にしてもいくつもの国境を跨ぐことになり、コストは經由国の数だけ膨らむ。くわえて不安なことは、經由国の政治リスクだ。現在近隣国との関係はおおむね良好だが、問題がないわけではない。たとえば水資源である。降雨の少ない中央アジアでは、先述の西流する

内陸河川が主要な水源であるが、アラル海の砂漠化^{*}など大きな問題を抱えている。しかもこれらは国際河川として、河川自体が国境となっている場合もあり、また上流と下流の国の間で利害がねに存在する。しかしながら久しぶりに訪れたウズベキスタンは、相変わらず明るく優しい国であった。独立してから30年足らずで、国の人口が約2100万人から3380万人へと増えた。したがって年齢構成でも、55歳未満の人口比が86パーセントと圧倒的に若い国なのである。町には子どもや若者が溢れ、活気のある様子に国としてのエネルギーを感じる。おりしも訪れた夏季は結婚シーズンで、有名な世界遺産の美しい街並みを背景に、あちらこちらで新婚カップルがドレス姿で記念写真を撮っていた。なんだか、経済指標のGDPなどの数字とは無縁に、数値化できない豊かさや幸せがあるよううで、少しうらやましい気持ちになってしまった。



左：子どもたちは人懐っこい。世界遺産をバックに素敵なポーズ。ブハラにて。中：名物メロンの季節。街道には露店が並ぶ。その大きさに似つかわしくない濃厚な甘さは世界一とか。右：田舎の民家の中庭でくつろぐおばあちゃんと孫たち。スルハンダリヤ州。



サマルカンド、レジスタン広場のティラカリ・マドラサ(イスラム教の学院)。礼拝堂に入る婦人たち。経年変化なのか建物がゆがんでいるが、壮麗な装飾は衰えていない。